

《研究ノート》

週刊『平民新聞』の再検討

— 教育、子どもに関する記事に焦点を当てて —

貞 清 裕 介

アブストラクト

本研究ノートは、1903（明治36）年に結社された平民社の機関紙である週刊『平民新聞』の教育や子どもに関する記事を収集しその再検討を行っていく。資料は7つの項目で整理し、その項目は「学校種、教育者、学習者、子ども、女工、道徳、その他教育」である。資料を再検討した結果、週刊『平民新聞』では様々な教育問題や子どもの実態を取り扱っている。このことから、教育学の分野から、当時の教育問題や子どもの実態の研究を進めるにあたって評価できる資料が多くあると言える。

キーワード

週刊『平民新聞』、学校、教師、子ども、道徳

Key Word

Weekly "Heimin Shinbun", school, teacher, child, moral

1. はじめに

本研究ノートは、1903（明治36）年に結社された平民社の機関紙である週刊『平民新聞』の教育に関する記事の再検討を行っていく。国史大辞典によると、「日露戦争を前に主戦論に転じた『万朝報』から退社した幸徳秋水と堺利彦は、非戦論と社会主義を宣伝する新聞の創刊を計画し、（中略）東京有楽町に平民社を設けた」¹とまとめられている。平民社の主張は、「合法的、議会主義的な社会民主主義を基調とし、キリスト教的な人道主義・平和主義の色彩を色濃く反映」²していたとされている。平民社は週刊『平民新聞』を発行したが、日露戦争を機に弾圧が強まり第64号で廃刊、その後継紙として週刊『直言』を発刊したが相次ぐ発行禁止になり第32号で廃刊になった。これらの事情から平民社は、経営の維持が困難となり解散となった。

その平民社の教育活動を評価した研究に石戸谷哲夫が挙げられる。石戸谷は、「小学校教員が、その一部にもせよ、社会主義思想を知り始めたのは、明治30年代後期、日露戦争の頃からである。主として平民社の働きかけによるものだった。労働組合としての教育組合を結成することも、平民社がはじめて示唆した」³と論じている。このように、平民社は小学校の教育に関心を持っており、そこに対し様々な活動⁴を行っていた。また、購入層についても青年層に次いで、二番目に小学校教員の層が多かったことも明らかにしている。このように、平民社の教育活動が評価されている一方で、平民社が発行している新聞の記事を教育の視点で整理した研究が見当たらない。そこで、本稿は平民社が発行した最初の機関紙である週刊『平民新聞』から教育に関する記事を整理、再検討していく。

2、週刊『平民新聞』の概要

週刊『平民新聞』は、「日露戦争の危機切迫した1903（明治36）年10月『万朝報』を退社した幸徳秋水堺利彦（利彦）等が、社会主義特に非戦論主張のために発行した週刊新聞」⁵である。『万朝報』を発行していた朝報社は、もともと対露問題に対しては非戦論の立場を示していたが、「ブルジョア民主主義の立場にあった同僚記者圓城寺清（天山）、松井廣吉（柏軒）などが、早くから強硬論を表明していた」⁶ため朝報社も世論の日露戦争論に同調していくこととなった。そのため、幸徳秋水と堺利彦は「退社の辞」にて、「予等二人は不幸にも対露問題に関して朝報紙と意見を異にするに至れり」⁷と述べ、朝報社との意見の相違により退社することとなり、週刊『平民新聞』の発行に至ったのである。週刊『平民新聞』の原本は、「縦38.5cm、横約27.5cm、1頁5号活字5段組を基本とし、第1号は12頁、第2、第8号は各10頁であるほか、全部8頁建で各号とも最後の頁を広告」⁸としている。また週刊『平民新聞』は8,000部の創刊号を出し、第59号までの総発行部数は約20万、従って各号平均3,300余部発行したことになる⁹。

週刊『平民新聞』は1903（明治36）年11月15日に創刊し、毎週日曜日に発行し、1905（明治38）年1月29日に第64号を以て廃刊した。廃刊の経緯としては、日露戦争の機運が高まったことで社会主義の弾圧が強まり、社会主義の機関紙として発行していた週刊『平民新聞』も弾圧¹⁰の影響を受けた。また、林尚男は、週刊『平民新聞』が税金の問題や教育の問題などを扱い「国家権力の根幹にふれたからこそ弾圧の対象となった」¹¹と指摘している。

そして、週刊『平民新聞』を廃刊に追い込んだ原因が、石川三四郎が執筆した「小学教師に告ぐ」である。「小学教師に告ぐ」は、1875（明治8）年に発布した新聞紙条例に抵触し、その摘発された内容は『官報 第6410号』¹²に示されている。この事件を受けて、編集発行人の西川光次郎と印刷人の幸徳秋水は朝憲紊乱罪で起訴され、両名とも禁錮5ヵ月、罰金50円の刑に処された。週刊『平民新聞』は、発行の中心人物を2人失い50円の罰金を受けたことで、経営上厳しくなったため廃刊に至ることになった。

3、資料収集の手法

まず、本稿で扱う週刊『平民新聞』の教育、子どもに関する記事を収集するために用いた資料を提示したい。その資料は以下のものである。

服部之総・小西四郎監修、『平民新聞〔一〕』、創元社、1953年
服部之総・小西四郎監修、『平民新聞〔二〕』、創元社、1954年
服部之総・小西四郎監修、『平民新聞〔三〕』、創元社、1955年
服部之総・小西四郎監修、『平民新聞〔四〕』、創元社、1958年

服部之総、小西四郎が監修した『平民新聞』は、広告と新刊図書紹介で批評のないもの以外はすべての記事を収録している。そこで、週刊『平民新聞』の記事が整理されて収録されている本資料を用いることは、本稿の目的である教育に関する記事を収集整理する上で有益なため、これを用いた。

本稿では上記の資料を用いて、いくつかのキーワードに着目して教育に関する記事を収集した。その収集したキーワードは以下の通りである。

- ①、記事名に「学校種」が記載されているもの
- ②、記事名に「教師」、「教員」、「教授」と教育者に分類されるキーワードがあるもの
- ③、記事名に「児童」、「生徒」、「学生」と学習者に分類されるキーワードがあるもの
- ④、記事名に「子」、「児」という言葉が「子ども」を指しているもの
- ⑤、記事名に「女工」、「工女」というキーワードがあるもの
- ⑥、記事名に「道德」、「修身」、「御真影」というキーワードがあるもの
- ⑦、記事名に「教育」及び教育に関わる用語のキーワードがあるもの

以上の7つのキーワードに従って収集した。また、上記のキーワードが含まれていない新聞記事であっても、内容が教育に関するものであった場合も収集した。この手順で収集した資料を次節で整理し、検討していきたい。

4、週刊『平民新聞』の教育に関する記事の整理と再検討

はじめに、資料整理の手法を提示していく。本稿の資料整理は、前節のキーワード①～⑦で提示したものを項目別にまとめて号順に並べた。また、記事名だけでなく、記事の分類も併せて記した。その際、記事分類は服部之総、小西四郎監修の『平民新聞』にならって分類した¹³。ただ、すべての記事が服部之総、小西四郎監修の『平民新聞』では分類されてはいないため、そのような記事については適宜筆者が記事分類のカテゴリーを作り分類した。また、執筆者が空欄の箇所は、執筆者不明である。

表 1 週刊『平民新聞』の学校種に関する記事

記事名	執筆者	記事分類	号
クーバーユニオン	野上啓之助	雑	2
社会党日曜学校		世界の新聞	15
早稲田中学校より	かなえ	雑	15
早稲田中学に於ける一珍事		日本の新聞	16
社会主義日曜学校		世界の新聞	36
中学校の惨事		日本の新聞	45
『ラサールを読む』(ハーバード大学図書館に於て)	金子喜一	活動記録	56
ボストン便りハーバード大学書籍館において	金子喜一	活動記録	59
ボストン便り (五) ハーバード大学図書館に於て	金子喜一	活動記録	63
トルストイとクラボトキンハーバード大学書籍館に於て	金子喜一	活動記録	64

表1には、週刊『平民新聞』の学校種に関する記事をまとめた。学校種の記事で掲載された学校種は、中学校、日曜学校、大学、クーバーユニオンである。日本国内に関する記事は中学校が占めている。特に、早稲田中学校に関する記事が15号、16号と連続している。その二つの内容は、早稲田中学校が主戦論に傾いていると記されている。そのため、その状態の早稲田中学校で社会主義を主張したところ暴行を受けたという記事もある。

また、記事分類が「世界の新聞」の記事は社会主義の日曜学校についてである。社会主義の日曜学校が成功していることを紹介している。イギリスやアメリカで日曜学校が設置されていることもわかる。

最後に、アメリカのハーバード大学、クーバーユニオンの記事に関して触れておきたい。金子喜一はハーバード大学から活動記録を送っており、大学での活動を報告している。クーバーユニオンの記事は成功した社会教育として紹介する内容となっている。学校種の記事については、学校の実情を報告や紹介する記事が中心となっていると言える。

表 2 週刊『平民新聞』の教育者に関する記事

記事名	執筆者	記事分類	号
小学教師の悲むべき地位	瀧澤菊太郎	文壇演壇	12
社会主義教授の免職		世界の新聞	21
社会主義者教員組合		世界の新聞	21
地方通信 一小学校教員より		日本の新聞	23
部下教員志願者の増加		日本の新聞	26
教育者の偽善		日本の新聞	32
非戦論者と教育者	隈川 教育実験会	文壇演壇	32
地方教育家の運動		日本の新聞	37
時局と小学教師		日本の新聞	38
男女教員俸給均一同盟		世界の新聞	41
出征教員二千名		日本の新聞	44
教育者と国家社会主義	樋口勘次郎	図書紹介	44
小学教員の生活難		文壇演壇	47
米国の男女教員比例		世界の新聞	51
小学教師に告ぐ	石川三四郎	論考	52
戦争に対する教育者の態度	無価珍子	論考	52

表2では、週刊『平民新聞』の教育者に関する記事を整理した。記事名を見ると、教師の地位や給料など待遇面の記事が見受けられる。また、当時の戦争賛美に傾いている教育、教員を批判するものが多い。この内容を色濃く出した論考が石川三四郎の「小学教師に告ぐ」であり、それが原因で平民新聞を廃刊に追い込むきっかけになったものである。また、「小学教師に告ぐ」と同号の「戦争に対する教育者の態度」でも同様な主張が見られる。

さらに、記事分類の「世界の新聞」では、教員組合や教員の給料など教員の待遇面の改善する活動を紹介する趣旨が見受けられる。この教育者に関する記事からは、小学校教師の待遇面の改善や当時の学校教育を批判する内容が多く見られた。また、現職の学校教師が寄稿しているものもある。

表3 週刊『平民新聞』の学習者に関する記事

記事名	執筆者	記事分類	号
理想郷（五）児童の教育	モリス原著 堺利彦訳	翻訳	11
独逸の児童労働法		世界の新聞	16
戦争と小学児童		論考	19
人情を損へる事実		日本の新聞	19
小学生徒の社会主義思想	小学生の作文	文壇演壇	22
新入学生の減少		日本の新聞	23
露国学生の決議		世界の新聞	23
小学児童の食物供給		世界の新聞	24
露国革命奇談神愁鬼哭（三）学生の伝道	幸徳秋水抄訳	翻訳	25
学校卒業生を如何にすべき		文壇演壇	25
学生自殺の流行		日本の新聞	26
小学生徒の理想		日本の新聞	31
女学生に贈る		論考	33
小学生徒に弁当給与		世界の新聞	34
新卒業生に告ぐ		雑	35
受験者に告ぐ		雑	35
東京大学卒業生		日本の新聞	36
小学生徒発狂の原因		日本の新聞	43
小学生徒電車無賃		世界の新聞	51
児童は皆音楽の天才を有す		世界の新聞	56
学齡児童の無料給与		世界の新聞	57
露国社会党の大活動 学生と巡査との大争闘		世界の新聞	58

表3の学習者に関する記事は、週刊『平民新聞』の教育に関する記事を収集してまとめたなかでは比較的多かった。その多くは、児童や小学というように小学生の問題を扱っている。ここからも、平民社は小学校教育に関心を持っていることがうかがえる。また、学習者の多くは「日本の新聞」、「世界の新聞」に分類される記事が多いことも特徴である。加えて、記事分類での「世界の新聞」では、学生への援助や福祉を紹介する記事名が見られる。このように、社会主義者ならではの視点がこの学習者の記事からは見られた。

だが、小学校の記事が多い一方で、学生、大学生に関する記事もある。卒業生の記事に関しては、学生の問題ではなく、帝国主義的政策を批判しその社会も批判する記事である。

表 4 週刊『平民新聞』の子どもに関する記事

記事名	執筆者	記事分類	号
富者の子弟と貧家の子弟	四谷佐川	日本の新聞	11
親子の情と生活問題		日本の新聞	19
親子四人枕を並べて餓死す		地方通信	25
人の子を賊ふ者		日本の新聞	28
軍国的棄児		日本の新聞	50
飲食代の代りに妻子		日本の新聞	50
少年労働の増加		世界の新聞	52

表4では、週刊『平民新聞』の子どもに関する記事をまとめたものである。この子どもに関する記事に論考はなく、「日本の新聞」に分類される記事が中心であった。その内容は困窮している家庭の内容が報じられ、なかにはそれが原因で子どもやその家族が亡くなっている報道も見られる。このことから、週刊『平民新聞』の子どもに関する記事は困窮に視点がおいてあったと言える。さらに、本稿では子どもに関する記事だけを収集したが、貧困問題を取り上げた記事は週刊『平民新聞』には、まだ多くある。

表 5 週刊『平民新聞』の女工に関する記事

記事名	執筆者	記事分類	号
女工の同盟罷業		日本の新聞	3
砲兵工廠と女工		日本の新聞	3
工女の虐待		日本の新聞	4
工女の掠奪		日本の新聞	12
紡績工女の実情	深谷蒼茫	日本の新聞	13
米国女工の罷工		世界の新聞	25
瓦斯紡績工女の危険		日本の新聞	50
女工の同盟		日本の新聞	51
工女の歌	弧剣	歌	59

表5では、週刊『平民新聞』の女工に関する記事をまとめたものである。女工の記事分類のほとんどは「日本の新聞」となっている。女工については、平民社の女子教育の視点が見られる点で非常に重要なものである。女工の資料は、女工たちのストライキを起した報道から、女工たちを虐待、略奪するような報道まである。ただ、女性問題を多く扱っている週刊『平民新聞』だが、女工に関する資料は少ないように考える。しかし、深谷蒼茫の「砲兵工廠と女工」には、女工たちの教室や生活環境も書かれており、教育記事としては一考の価値がある。また、女工の生活環境の劣悪さ待遇の悪さを報じており、その社会問題に迫及している点が特徴と言える。

表 6 週刊『平民新聞』の道德に関する記事

記事名	執筆者	記事分類	号
又しても御真影騒ぎ		日本の新聞	9
戦争と道德		論考	11
道德の理想		論考	11
国際道德を成立たしむる方策		文壇演壇	34
市民道德		文壇演壇	38
婦人道德の標準		日本の新聞	51
小学修身書漫評	堺利彦	論考	52
社会主義運動の道德的效果		世界の新聞	55

表6では、道德に関する記事を分類した。当時は日露戦争の気運が高まり道德教育も社会問題であったため本稿では収集して整理した。まず、この道德に関する記事には執筆者が明記されているものがないという特徴がある。そして、週刊『平民新聞』で論じられている道德は多方面に論じられており、御真影や戦争、国際、市民など様々な視点の資料があるのも特徴と言える。

表 7 週刊『平民新聞』のその他の教育に関する記事

記事名	執筆者	記事分類	号
学制改革の大綱		日本の新聞	13
文相の訓令提灯行列の禁止		日本の新聞	15
恋愛と教育	木下尚江	論考	24
社会主義研究の必要性（教育学術界）		文壇演壇	24
平民新聞と世論雑誌教育学術界曰く		宣伝	25
トルストイの教育意見	樋口勘次郎	文壇演壇	29
教育上より観察したるニイチェ	久津見巖村	文壇演壇	31
宗教と教育との分離		世界の新聞	36
白痴児其研究及教育	石井亮一	図書紹介	44
社会党が要求する教育制度		世界の新聞	45
教育費削減説		日本の新聞	48
ト翁近世科学観	石原初太郎	文壇演壇	49
社会主義者の教育観	西川光次郎	論考	52
社会主義者を教育界に入れよ		宣伝	52
戦争の教育に及ぼす影響		日本の新聞	55

最後の表7は、週刊『平民新聞』のその他の教育に関する記事を整理してまとめたものである。表7を見ると、恋愛や宗教、社会主義、戦争など教育を多方面の分野から論じている。また、この1904（明治37）年にはトルストイやニーチェやクロポトキン（ト翁）などの教育を受容していることもわかる。また、白痴児という精神病児への教育研究が行われていることも週刊『平民新聞』では紹介している。

5、おわりに

本研究ノートは、週刊『平民新聞』の教育に関する記事を整理し検討してきた。週刊『平民新聞』では、様々な教育問題や子どもの実態を取り扱っている。特に、小学校や小学教師、小学生等の初等教育に関する記事が比較的多いため、平民社は小学校教育には関心が高かったと言える。そのうえで、教育学の分野から、当時の教育問題や子どもの実態の研究を進めるにあたって評価できる資料が多くあると言える。今後は週刊『直言』の資料を収集しその整理を行っていき、最終的には平民社の教育活動を明らかにしていくことが課題である。

参考文献

- 服部之総・小西四郎監修、『平民新聞〔一〕』、創元社、1953年
 服部之総・小西四郎監修、『平民新聞〔二〕』、創元社、1954年
 服部之総・小西四郎監修、『平民新聞〔三〕』、創元社、1955年
 服部之総・小西四郎監修、『平民新聞〔四〕』、創元社、1958年
 石戸谷哲夫、『日本教員史研究』、講談社、1967年
 林尚男、『平民社の人びと―秋水・枯川・尚江・栄―』、朝日新聞社、1990年
 国史大辞典編集委員会、『国史大辞典 第12巻』、吉川弘文館、1991年
 「萬朝報」刊行会編、『萬朝報 第45巻』、日本図書センター、1986年
 大蔵省印刷局編、『官報 第6410号』、国立国会図書館デジタルコレクション、1904年

注

- ¹ 国史大辞典編集委員会『国史大辞典 第12巻』、吉川弘文館、1991年、474頁
² 同上
³ 石戸谷哲夫、『日本教員史研究』、講談社、1967年、332頁
⁴ 活動例について、石戸谷は「精力的な遊説活動のさきざきで小学校を訪れて、社会主義出版物を売ったり教員と議論したりしている。地方で開かれている社会主義演説会に小学校教員が出席傍聴していることが報告記事に出ているし、また聴衆が発している質問内容によって現職教員が聴いていることがわかる」と論じている。(引用文献、石戸谷哲夫、前掲『日本教員史研究』、335頁)
⁵ 服部之総・小西四郎監修、『平民新聞〔一〕』、創元社、1953年、「解説」、1頁 解説者は西田長壽である。尚、括弧内は筆者によるものである。
⁶ 同上書、3頁
⁷ 堺利彦、幸徳伝次郎、「退社の辞」、『萬朝報 第3623号』、1903年10月12日（「萬朝報」刊行会編『萬朝報 第45巻』、日本図書センター、1986年、所収）
⁸ 前掲書、『平民新聞〔一〕』、「解説」、1頁
⁹ 同上書、14頁
¹⁰ 弾圧の一例として、西田長壽の「解説」には「社会主義者の講演会は次々と中止解散を命ぜられ、平民新聞の読者調査が行われ、同志の園遊会などすら禁止解散を命ぜられるという風であった」と書かれている。(同上書、『平民新聞〔一〕』、「解説」、13頁)
¹¹ 林尚男、『平民社の人びと―秋水・枯川・尚江・栄―』、朝日新聞社、1990年、72頁
¹² 大蔵省印刷局編、『官報 第6410号』、1904年11月10日、4頁に書かれている内容は次の通りである。
 警察
 發賣頒布停止

東京府東京市ニ於テ本月六日發行ノ平民新聞第五十二號ハ新聞紙條例第三十三條違反ト認メ告發シタルニ付昨九日内務大臣ニ於テ其發賣頒布ヲ停止シ假ニ之ヲ差押ヘ且ツ小学教師ニ告ク、所謂愛國者ノ狼狽、戦争ニ對スル教育者ノ態度ト題スル記事ト同一主旨事項ノ記載ヲ停止シタリ

- ¹³ 服部之総・小西四郎監修の『週刊新聞』で分類されているものの一部は、史料の週刊『平民新聞』でも確認できる。例えば、「日本の新聞」や「世界の新聞」、「文談演壇」等は史料で確認できる。